

大雪に伴う被害拡大防止対策について

気象災害対策
平成30年2月13日
中央普及支援センター

1 北陸地方1ヶ月予報 (2月10日から3月9日までの天候見通し)

<平成30年2月8日新潟地方气象台発表>

期間のはじめは、降雪量がかなり多くなる可能性があります。

向こう1か月は平年に比べ、曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

平均気温は平年並または低い確率がともに40%、降水量は多い確率が50%、日照時間は少ない確率が50%、降雪量が多い確率が50%です。

週別の気温は1週目が平年並の確率50%、2週目は低い確率50%です。

2 当面の管理の注意点

本年、2月4日～7日にかけての大雪で、各地で被害が確認されています。今後被害を最小限に留めるため、下記の降雪後の対策に留意して下さい。

1 パイプハウス (水稻育苗用パイプハウス、園芸用パイプハウス)

- (1) 更なる積雪による倒壊を防ぐため、ビニールの破損等は速やかに補修するとともに、できるだけ屋根雪を滑落させ、天井に雪を乗せたままにしない。

なお、屋根雪はハウス内温度を4℃以上にするとほとんどの場合滑落するが、滑落しない場合は手作業で強制的に滑落させる。

- (2) ビニールを外したハウスでもパイプ部分に大量の雪が積もると倒壊の恐れがあるので、雪を落とすようにする。
- (3) 降雪が1mを超えるようなドカ雪等の緊急時には、ビニールを切ってハウスの倒壊を防止する。

ビニールを切るためにハウスに入る場合は下敷きにならないよう細心の注意をして作業を行うとともに、ビニール切断時は左右対称に行っていく。

(園芸施設共済に加入している場合は、切断前に農業共済組合に確認する)。

- (4) 日差しにより急激に温度が上昇するため、ハウスサイドの換気ができるよう、ハウス側面を早急に除雪する。

2 麦類

(1) 排水溝の点検

融雪後、圃場巡回を実施し、地表面の排水が速やかに行われているか排水溝の点検を行い、必要があれば排水溝の手直しや追加を行う。

(2) 消雪期追肥

①施用時期

- ・消雪期追肥は消雪後に、平均気温4～5℃を確認次第、すみやかに実施する。

→平年であれば2月下旬～3月上旬である。

積雪がある場合は融雪剤（くん炭等）を散布し、融雪を促す。

②施用量

(大麦一発肥料の場合)

- ・消雪期の茎数が700本/m²より少ない場合は、窒素量で2kg/10aを目安に施用する。

(分施体系の場合)

- ・窒素量で3～4kg/10aを目安に施用する。

※茎数が800本/m²以上の場合は、窒素量3kg/10aとする。

3 野菜・花き

(1) 施設の野菜・花き

(ビニールハウスが被害を受けた場合)

- ① 収穫期を迎えている品目（小かぶ、チンゲンサイ等）については、被害にあったものを除き、小ぶりなものでも速やかに出荷する。
なお、生育初期で被害にあった場合（こまつな等）は、ビニールハウスの補修を行った上で、播き直す。
- ② 葉や茎が折れる等の被害を受けたエアリーフローラは、切り花生産から次年度の球根養成するための栽培に切り替える。その際、保温資材を掛ける等できる限り株の保温に努める。

(ビニールハウスが被害を受けていない場合)

- ① 育苗中の品目（すいか、トマト、キュウリ等）については、各ステージでの適温管理に努めるとともに、過湿による病害発生を防ぐため、晴天時にはトンネルを換気し湿度の低下に努める。

(2) 露地の野菜・花き

できるだけ早期に融雪するため、くん炭等の融雪資材を散布するとともに、雪解け水が停滞しないよう排水溝を確保し、速やかな排水を促す。

4 果樹

(1) 樹体被害

- ① 冠雪が50cmを越えると枝折れや枝裂け等の被害が出やすいので、降雪量を見ながら着雪の払い落としを行う。
- ② 降雪後には太陽熱吸収促進のため、融雪剤（熔燐等）の散布、ある

いは散水を行い融雪を積極的に促進させる。

- ③ 枝の皮部が 1/2～1/3 が完全に繋がっていれば、速やかに回復措置を実施する。
- ④ 主枝裂開部はナイフで削り取りボルト締め、あるいはカスガイ打ちし、傷口に水が入らないよう接合部に殺菌塗布剤を塗布して癒合を図る。癒合するまでは支柱などで、支持補強する。
- ⑤ 枝の欠損部は傷口を平らに削った後、殺菌塗布剤を塗って枯れ込みを防ぐ。
- ⑥ 裂開した枝では、側枝や結果枝の数を減らして着果負担を軽くする。

(2) 果樹棚等の施設

- ① ドカ雪の場合はナシ、ブドウ等は棚上の積雪状況に注意し、必要に応じて早急に雪降ろしを実施する。
- ② 激しい降雪により果樹棚が完全に埋没して倒壊の恐れがある場合は、周囲線を掘り起こし、周囲柱の外側の積雪を踏み込む。さらに、幹線、または小張線を切断し、枝を雪面上に引き上げることによって果樹棚の倒壊を防ぐ。
- ③ 倒壊した棚やハウスを解体した後、被害樹の処置を行った上で施設の復旧を図る。
(隅柱や周囲柱が倒壊していない場合は、園中央部に比べ周囲の樹体被害が軽いことから、当年の所得確保のために被害の軽い樹を出来る限り残す)

(3) 野ウサギ、野ネズミ食害防止対策

- ① 野ネズミの密度が高い地域では、地域全体で忌避剤の使用など防御対策を講じる。
- ② 野ウサギでは防兎ネットで園全体を囲ったり、餌となる剪定枝を園の外周に積み、園内での食害を少なくする。

5 畜産・飼料作物

積雪による被害としては、畜舎の倒壊・破損、降雪による停電・断水や交通の遮断による飼料の入手困難等家畜のライフラインへの影響が考えられる。また、寒さによる発育不良も想定される(※対策は以下の通り)。

- ① 畜舎等の施設点検を行い、老朽化等により倒壊の恐れがある場合は必要に応じて補強等を行うとともに、屋根の雪下ろしを適切に実施すること。
なお、豪雪が予想される場合は、予め畜舎等大型建物の除雪計画を立てる。
- ② 畜舎の周囲等農場内の除雪を適切に行う。特に、飼料運搬車等車両の通路を確保するため、可能な限り農場内の道路の除雪に努めること。

【ショベルローダーによる畜舎周辺の除雪】



【人力による除雪】



- ③ 降雪による停電等緊急時に備え、自家発電機の準備、点検を行う。
- ④ 冬期間は、寒さにより水道管が凍結して水が出なくなったり破裂することがあることから、水道管や蛇口などには、保温材や凍結防止帯を巻く、水を少し出す等により水道管の凍結を防止する。
- ⑤ 降雪による交通の遮断等非常事態に備えて、飼料の在庫確認と購入手当を早めに行い、粗飼料なども含めて給与する飼料が不足、急変しないよう留意する。
- ⑥ イタリアンライグラスは、雪害・雪腐病の被害が出やすいので、可能な限り停滞水の早期排水に努める。また、イタリアンライグラスの播種にあたっては、耐雪性の高い品種を選定し、播種する。
- ⑦ 子畜や老畜・病畜については観察の強化に努め、体温維持のため飼料の増給を行う。
- ⑧ 新生子牛では、自ら体温調節できる下限温度は15℃であり、哺乳中の子牛でも、5℃以下に気温が下がると発育が阻害されるので、保温ランプなどの準備をしておく。
- ⑨ 新生子豚については、被毛が薄く皮下脂肪層が極めて薄く、寒さに非常に弱いため、30℃前後の保温が必要。
このため、子豚の重なり具合などを確認し、保温灯・保温箱の設置、床のすき間を防ぐ等の対策が必要。

【子豚における保温灯の設置事例】

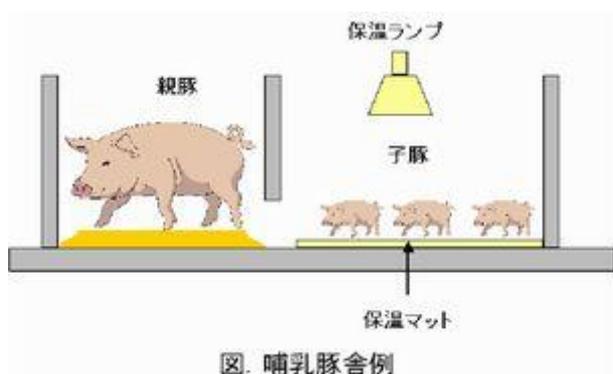


図. 哺乳豚舎例



【データ】豚のステージ別快適温度（℃）

子豚	下限温度	上限温度	ステージ	快適温度帯(℃)	
分娩及び哺乳期	32	—	分娩前	18	25
離乳時	30	—	分娩時	22	25
移動時(体重5kg)	28	33	離乳時	20	25
体重10kg	25	30	妊娠豚舎	18	25
体重20kg	22	29	繁殖豚舎	16	25
			雄豚舎及び交配	16	—

【建築資材の断熱材利用】



- ⑩ 鶏では、呼吸器病の発生を予防するため、昼間の比較的温かい時間帯に、換気を心がけ、できるだけ風を防ぎ、保温対策を徹底する。
- ⑪ 寒さ対策として、建築資材の断熱材等を利用し、家畜に最適な環境を作る。
- ⑫ 冬期間は、畜舎内の湿度やアンモニアガス等の有毒ガス濃度の上昇から、呼吸器系統の疾病の多発が予想されることから、畜舎の換気が不十分とならないよう、換気扇、窓の開閉をこまめに実施して、空気の汚染による生産性の低下防止に努める。
- ⑬ 肉牛、肉豚、生乳、鶏卵等の家畜・畜産物の集出荷路線の確保に万全を期す。